

書誌からみた後藤総一郎元館長

飯澤 文夫*

1996年春、学長の交代に伴って吉田忠雄館長(政治経済学部教授)が任期半ばで退任され、残任期間を後藤先生が務められることが伝わってきた時、図書館職員の中に歓迎せざる空気があったことは確かである。まもなく己の不明を恥じることになるのだが、私もその一人であった。

図書館はその頃、ライブラリーカード(磁気カード)の導入や、文部省学術情報センターのネットワークと結んだ目録作成など、サービスと事務のシステム化を推し進めていた。それを、学生活動家から管理強化、産官学連携と攻撃され、連日の抗議行動に晒された。また、奇妙なタイミングで蔵書に悪質な差別落書きが発見されたことなどにより、学生自治組織と図書館長との団交がもたれ、学生集団が事務室に押しかけてきてビラ撒きをし、片山事務部長や橋本庶務課長、私までもが取り囲まれ、長時間にわたってハンドマイクでアジられるといった事件が続いていた。庶務課カウンターには、その折の傷痕が今も消えずにある。

先生は1987年から90年まで学生部長の職にあり、活動家と対峙しておられた。そのイメージが職員の中にも残っていて、火に油を注ぎはしないかと危惧されたのである。それと、失礼ながらどう見ても先生に機械化・情報化の旗振りは似合わないと感じられたからでもある。

しかしながら先生は、私たちの不安を知ってか知らずか、まことに悠揚迫らぬ態度で図書館に乗り込んでこられた。そればかりか、後に奥様に

*いいざわ・ふみお / 教育振興部事業課長。当時、図書館事務部図書館庶務課に勤務。

伺ったところによれば、1999年までの3年間は、先生の生涯において、最も生き生きと楽しげに過ごされた時期の一つであったとのことである。

不安は全くの杞憂に終わった。そして私たちは、先生の矢継ぎ早の指示に忙殺され、時に翻弄され、しかし、今までに味わったことのない充実した濃密な時を過ごすことになるのである。

本特集では、「図書の譜」ははじめエポックとなる諸施策について、当時の担当者が振り返ることになっているので、ここでは、先生の関係論者をトレースしながら、いわば総論として、その足跡を辿ってみたい。

(リストで、「明治大学」を冠した雑誌名は「明大…」に、「図書の譜 - 明治大学図書館紀要」は「図書の譜」と省略した。引用等の出典は[]の文献番号で参照する。)

- [1] 1996.06 本学図書館の「新たなる可能性」に向けて 聞き手・高山幸子（「明大図書館報」57 p2-5）
- [2] 1996.06 図書館長に就任して「個性化」と「循環体系」の確立（「明大広報」400 p3）
- [3] 1996.12 「図書」の史譜（「LISM - 明大図書館情報システム課だより」37 p1）
- [4] 1997.03 「知」の創造 - 創刊にあたって（「図書の譜」1 前 p1-2）
- [5] 1997.03 対談・体験的書誌学論 『宮沢賢治全集』と『柳田国男全集』の編纂を通じて 対談者・入沢康夫（『図書の譜』1 p1-32）
- [6] 1997.05 新『校歌』物語（大学史の散歩道 8）（「明大学園だより」260 p8）
- [7] 1997.10 蔵書の個性化に向けて - 図書費配分の見直しを（論壇）（「明大広報」425 p2）
- [8] 1998.03 図書館の充実と活性化について - 研究用図書費の執行方法と配分方法の修正（「明大図書館報」62 p2-6）
- [9] 1998.03 対談 本学図書館の個性化に向けて 対談者・戸沢充則（「図書の譜」2 p1-19）

- [10] 1998.03 出版部再建に関する意見書 学長宛 (5p、資料 12p
1998.05 「明大教学基本計画速報」13 掲載の、
御子柴博 「大学出版部再建の意見書提出される」
に概要紹介)
- [11] 1999.01 座談会「図書館と司書職、そして生涯教育について」
出席者・三上昭彦、小林繁、鶴岡純子(「図書の譜」
3 p4-35)
- [12] 1999.01 インタビュー構成 明大図書館の至宝ウイット・ライ
ブラリー - 97 年度購入特別資料 話し手・森洋子
(「図書の譜」3 p130-145)
- [13] 1999.03 知の循環体系の着手と展望(「明大図書館報」65
p2-4)
- [14] 2000.03 梨花女子大学図書館(ソウル)(シリーズ・世界の図
書館 3)(「図書の譜」4 p224-227)
- [15] 2002.01 冒険としての読書 第 62 回私立大学図書館協会総会
記念講演(「私立大学図書館協会会報」117 p116-129
2002.03 「図書の譜」6 p244-262 に転載)
- [16] 2002.09 生涯学習時代と読書 平成 14 年度(第 88 回)
全国図書館大会への招待 第 1・第 2 分科会 公共図書
館 -暮らしを豊かに拓く図書館の力- 基調講演要旨
(「図書館雑誌」96(9) p666)
- [17] 2002.10 生涯学習と読書 第 1・第 2 分科会 公共図書館
-暮らしを豊かに拓く図書館の力- 基調講演レジ
ュメ(『全国図書館大会要綱 平成 14 年度第 88 回(群馬
大会)』 p14-15)

就任されるなり先生は、「明治大学図書館にはこれまで個性・哲学とい
うものがなかった」[1]と云われた。この発言は、私どもにとっては些か不
本意であった。何故なら、原正彦館長時代に、教員と図書館員が数年を要
して議論を交わし、21 世紀に向けての将来構想『U-PLAN21』(1988)を策
定していたからである。また、1993 年には、収書理念「明治大学図書館の

収書に関する基本方針」を打ち立ててもらった。今にしてみれば先生は、実績として具現化していない、方法論をもたない哲学は哲学とは呼ばない、とおっしゃりたかったのだらうと思う。

[1][2] は図書館長としての所信表明である。

[1] をインタビュースタイルにしたのは、平易に語りかけたいとの意向からである。「変容した社会の中で」「知のパラダイムの転換を求められている」今、「自然」や「あらゆる科学や学問と」「どう共生していくか」が問われている。「それに向けての歴史の材料をはじめ、良書、情報、資料を集めてわれわれは手助けをしなければならない」。「個性的な図書の選択・収集」をし、「広い意味でのエクステンションセンター」として「図書館を中心とした知の循環体系を確立」したい。については、図書館の「心臓部」である職員は、「書誌学的な研究」をし、自らを高めて行って欲しいと呼びかけられた。

[2] はそれを要約した形で、第一に、書庫に収まる「ダイヤモンド」たる蔵書に光をあてる(書誌解題をする)ことから「活性化」「個性化」を図る、第二に、「出版部の創設等」を基盤に、知の「循環体系」の形成に立ち向かっていきたい思いを「心の底から沸き立たせて」と述べている。

[3] は、小文ながら重要な文章である。情報化時代に対応した新図書館構想が進む中で、図書館名も、「学術情報センター」と変更することになっていた。ところが先生は、『易経』の「河図洛書」や、新井白石などの言葉を引いて、「学問の礎である『図書』をあつかう図書館の名誉と責任において」「図書館」を残すべきであると主張し、「一時の『道具』立てにまよわされてはならない。学問とは思想とは、たんなる流通する物としての“情報”ではないのである、というのがわたしのささやかな不滅の心情である」と、美しい文章で説かれた。理事会決定までしていた図書館名が覆った。

[6] は、校歌成立の秘話である。児玉花外の校歌自筆原稿が出現し、東北のS市が購入した。その情報を聞きつけた先生は、自らS市に乗り込んで譲渡の交渉をされ、めでたく本学図書館に納められた。ところが、原

稿は花外ではなく西條八十のものとなり、校歌成立の過程が明らかになる。後日譚がある。2001年10月、校歌作詞の報恩として、花外が眠る伊豆長岡の上行院での、「児玉花外顕彰の集い」を発案された。長吉理事長以下大学関係者参列のもと、マンドリン倶楽部演奏の校歌が流れる感動的な式典となった。先生の行動力には驚嘆するほかはない。

[8]は、タフネゴシエータの先生でなければできなかった改革である。長年の慣習で、「予算の細分化と執行状況が、その効率的な運用を妨げ、蔵書の充実を阻害する要因」となっていた。大学は厳しい経営環境に置かれ、大幅な図書予算の増額は望むべくもない。そうした状況下であるからこそ、教育や「研究上必要とする資料の要望に十分に答えながらも、個性化の実現と蔵書の充実」を図っていかなければならない。図書館スタッフ研修会、学長スタッフ研修会、図書委員会で議論を積み重ね、学部長懇談会で私たち担当者に研究図書費執行方法の不具合を説明させるという離技もあり、図書費配分の仕組みに大きなミスが入った。「収書や予算執行に図書館の意思」が大きく反映されるようになったことで、[13]で述べる「蔵書の個性形成」が着実に進み出したのである。

では何故に蔵書の個性化が必要なのか。例えば、日本とアジアの地方史誌の収集については、本学は「創立以来地方とアジア諸国から多くの学生を集め、それぞれにおいて次代を担う有為の人材をそだててきたという歴史がある」、「地域に生きる住民の本来の姿に向けて、羅針盤の役割を担うことが本学の建学時の初心」であり、そうした史料を「系統的、継続的に収集」し、「地域づくりの利用に供することを通じて公共の福祉に資することは、本学のアイデンティティの確立と社会的信頼に応える道である」と、明快にその目的意識を提示された。

[4]など「図書の譜」創刊の経緯等は別稿に譲り、[9][11]についてのみ触れておきたい。

[9]は戸沢充則学長との対話である。図書館改革を進めるには、教学トップの理解は欠かせない。学長を図書館の場に引き出すことで、学内での図書館に対する認識を高めたいとする先生一流の戦略であった。互いの「図

書館の思い出」を口火に、「本学図書館の現状」を説明し、「蔵書の個性化」と、その裏づけとなる「図書費の見直し」にリードしている。

[11] は、資格課程の三上昭彦文学部教授と小林繁助教授、文学部卒業で啓明学園教諭の鶴岡純子さんとの座談である。当時図書館は30年来の宿願ともいべき司書課程の設置を大学に働きかけていた。座談会は学内世論を喚起する狙いもあった。司書課程設置の意義を、一つには、「生涯教育の時代」に核になるのは図書館であり、それを担う「優れた司書」を明大から世に送り出したいからであり、図書館職員には、司書養成の現場に立つことで、「専門職」に育って欲しいと語っている。

[10] は図書館長名で戸沢学長に提出された意見書である。出版部再建は先生の悲願であった。「大学が社会や文化に対して直接的に貢献すべき役割というのは、知的生産物を社会に発信することではないか、そしてそれを具体的に実現できるのは出版部」であり、「知の循環体系」のキーであるが故に、「図書館がひとつの“産婆役”としての役割を果たす」のだと主張された。学長室、研究所、博物館、企画室、広報部など広く関連機関に呼びかけて勉強会を重ねた。理事に就かれてからも執念を燃やされたが、遂に日の目を見ることはなかった。さぞかし無念であったことだろう。

[13] は退任に当たっての総括と展望である。

行政職としての業績を詳細に検証し、「『学問とは本を読むことである』という問いかけに、図書館の機能として応えることである」と考え、「図書館の歴史と現状を眺め」、「理念の政策実現」に取り組んできたと記している。3年間の図書館の動きを網羅的に列記されているが、先生の意志が強く息づいたと思われるものを抜き出すと次のとおりである。

- 1) 蔵書の個性形成 (地方史の収集、特別資料・貴重図書の収集、バランスある図書の収集、山手線沿線大学図書館相互協力懇談会の開催)
- 2) 閲覧サービスの充実 (新任教員利用ガイダンスの実施、公開講座受講者への図書館の開放、整理の滞貨解消と新刊書の迅速提供、駿河台図書館における学生の入庫、和泉図書館のシラバス本コーナー設置)

- 3) 研修の充実 (スタッフ研修会の実施、中国暨南大学図書館員の研修受入れ、「図書」の創刊、新資料「校歌物語」の検証、司書課程設置の提言、出版部再建の提言)
- 4) その他 (入学式・卒業式での図書館長の登壇、図書館名称の決定、全国私立大学図書館協会会長校引受け)

1999年以降の展望としては、従前事業の継続に併せて、新規に、①和泉・生田図書館の学生の在庫、②図書館利用者教育実現への協力、③校友等への図書貸出し、④新図書館に24時間オープン閲覧室開設への可能性の追求、⑤図書館史準備委員会の設置、⑥図書館専門職の制度化、などを掲げられた。このうち、①②③は既の実現し、⑤も着手された。④は新中央図書館において一定の設備仕様が施された。

最後に、協力をしてくれた図書館員、図書委員、学長、学部長、教務理事に感謝を捧げ、「『知』が通いはじめた三年」であったと結ばれている。

図書館は3年間で確実に進化を遂げ、図書館員も大きな自信を得た。感謝しなければならないのは私たちの方である。

[14]から[17]は図書館長を退かれてからのものである。

[16]と[17]は幻の講演要旨である。2002年9月に群馬県前橋市で開催された全国図書館大会で行われるはずであったが、癌の治療に専念すべく断念された。[16]では、「『読書』は、生涯にわたる賢い人、あるいは賢く生きようとしている人の、最初のそして最後の『道祖神』ともいうべき『信仰』でもあると私は思いつづけている。」とし、[17]では、「幼年期 おとぎ話 想像力を育む」「青年・学生 文学・評論・歴史 教養の形成」「高齢者 地域史・歴史 自己認識」と、「常民大学」での生活者の学習経験やご自身の読書体験を踏まえながら、読書の可能性を提言している。実現していればさぞかし多くの聴衆を魅了したことだろう。

[1]で問題提起をし、[8]で中間の検証をされ、[13]で総括と次への展望を示された。先生の書かれたものは、単なる意見や感想ではない。すべてが行動のための指針であり、布石であった。先生は風貌からも言動からも

一見して豪放磊落な人のように見られるが、実際は緻密、生真面目で、何事にも先々を見通した段取りをつけて進まれる方であった。

館長職は残任1年、任期2年の3年間と決めておられたようにも思われる。見事な起承転結であった。
